秋月橘門の跡を訪ねて

石川正雄
（宮崎県高鍋町）

秋月橘門は秋月左都夫の数代前の祖先から分かれた分家で、水筑姓である。

その詩集『橘門韻語』の巻頭に載っている谷永祚撰の『橘門先生伝』や「水筑大可」の略歴を読み種々疑問が起った。どうしても橘門が永く住んでいた佐伯に行って見る必要がある。

佐伯では羽柴弘先生を訪ねるがよいと沢武人氏に教えられ、ぶしつけながら電話でお願いすると、病後の保養中であるが、一週間後の十月三日なら来てもよいということであった。

その日はよく晴れて尾鈴山が美しく見えた。朝八時過ぎの特急に乗る。二時間で佐伯に着くはずである。それまでに谷永祚撰の伝記に今一度目を通し、佐伯で調査せねばならぬことも一応整理しておくことにした。

橘門先生は本名は龍（りょう）、字は伯起、秋月氏から分かれた一族で、本姓は劉である。高祖父の西信君は兄と共に宗家の高鍋藩主の秋月氏に仕えたが、ざん言する者があって流浪し、諸県郡本庄町（国富町）に住んだ。後、無実であることが明らかになって召還され、兄は復職したが、西信君はいさぎよしとせず、自ら耕して一生を終えた。西信君の兄が秋月左都夫の祖である。父の肖遥君に至って家を興そうと、子供達に書を学ばせること剣の如しであったという。橘門先生はその次男であった。文政七年（一八二四）十六歳の時、豊後日田に行き、広瀬淡窓の塾咸宜園に学んだ。

私は昭和四十六年咸宜園を訪れ、保存されている入門書綴りを見せてもらったことがある。その時、橘門先生と日高耳水の入門書をコピーさせてもらった。それには次の如く記されている。

日陽諸県郡本庄村　水筑　周一
入門文政七年甲申四月二日
紹介　荒木　平八

周一は橘門先生の当時の通称であったのであろう。文化六年（一八〇九）の生れだから文政七年は十六歳であ

る。紹介の荒木平八とはどんな関係の人か明らかでない。

周一は淡窓の門に学んだが、非常に貧しく人のために筆耕し、わずかな収入で生活し勉学に励んでいた。そのころ日田は徳川幕府の直轄領、いわゆる天領であった。時の日田の代官は塩谷某であった。橘門が才能のある優れた青年であるが、生活にも窮する苦学生であることを聞き、自分の秘書役としようと思い、師の淡窓に相談しその意向を本人に伝えさせた。塩谷代官としては多分に俊才橘門に同情し、その才を惜しんで重用しようという気持であったのであろう。しかし、青雲の志を持つ英才橘門は、師淡窓に辞退して言った。

「私が刻苦して学問しているのは人に使われようが為ではありません。学問は人の為にせず、自己の完成の為であります。それに代官と言ったって、そうたいした人物という訳では無いではありませんか」

と、自分の考えを率直に述べ、この交渉を打ち切ってほしいと言った。

これを聞いた代官塩谷氏はすっかり怒り、淡窓に命じ橘門を追放させた。追放しなければ橘門を逮捕するということで、淡窓もやむを得なかったのである。

橘門が日田を去る日は稀に見る大雪の日であった。橘門の意気はますます盛んで、ひょうひょうとして佐伯に行き、中島子玉の家に宿ることほとんど三年であった。

そして、折を見てまたこっそりと日田にまぎれ込み淡窓先生の教えを受けた。しかし、まもなく日田を去り、筑前福岡の亀井昭陽の門に入って学んだ。そして天保二年（一八三一）二十三歳の時に肥前島原に行き、塾を開いて子弟の教育に当たった。

この塾での教育も短い間で、島原を去って備前岡山に行き、医学を学ぶこと三年、それより大阪・京都・江戸を回って見聞を広め、それより郷里に帰り医者として開業した。

ところが、忽ち名声が高くなり大いに繁昌した。延岡藩の内藤侯はそれを召し抱えようと禄を贈り、天保十年（一八三九）ごろは延岡に住んでいた。本草学者の賀来飛霞（かくひか）が豊前宇佐郡佐田から延岡藩に聘せられ、『日向採薬記』を書くに至ったのは、天保十五年、延岡藩の家老上田但馬が本草学者の推薦を橘門に依頼したため、かねて交誼の深かった飛霞に強引とも言える招請をした結果である。当時、橘門は水筑太可と称し、

「太可先生」として知られていた。

しかし、太可先生は、医者として名声を得ることを望まなかった。たまたま、佐伯藩の十一代藩主毛利高泰に、藩校四教堂（しこうどう）の教授に招へいせられた。弘化四年（一八四七）橘門三十九歳の時であった。

橘門は子弟を教えるに当たって、諄々として懇切丁寧であったが、少しの過ちもゆるがせにせぬ厳しさがあり子弟はみな畏愛し、その教えに従った。藩主高泰（泰雲公）薨じ、十二代温良公高謙（たかあき）が家督を継ぐと、橘門はその侍講に任ぜられ、事により意見を求められると、いささかも遠慮せず、理非曲直を進言し赤誠を示した。

明治元年、維新政府が組織せられると、徴士として召し出されて参河県知事に任命されたが、まだ赴任しないうちに鎮守府の弁事に任ぜられ、さらに十二月には葛飾（かつしか）県知事（千葉県）に転じた。時に六十歳であった。政治の上で意を用いたことは、きびしさとわずらわしさを排除し、民力を愛育することであった。俸禄の余りは、ことごとく郷党・親戚の貧しい者、および若い時に世話になった家に分かち与えてた。明治三年正月老年の故をもって役を退いた時は、ほとんど無一物であった。橘門は人となり厳正剛毅で、美髯を蓄え、眉目秀でて爽やか音声がのびやかで、接する者は粛然として襟を正し、畏敬の念を抱かずにはおられない風格を備えていた。家庭にあっては厳粛であったが、孝心深く、家族に対してはやさしく、平和でなごやかな生活を楽しんだ

晩年には深く仏教の教理に心を潜め、最も殺生を戒めた。明治四年、廃藩の後は、東京牛込御門外、今の富士見町のあたりに居を構え、名士と交遊して詩酒に親しみ俗事を離れ清談を好み自適の生活を楽しんだ。明治十三年四月二十六日病んで没した。享年七十二歳であった。嗣子、新太郎は女子高等師範学校長であり、貴族院議員である。

橘門には数種の著がある。『橘門韻語』『橘門随筆』がよく知られ、『橘門韻語』は明治十六年十月、嗣子新太郎が選し、児玉昱蔵の出版した上・下二巻本である。

以上が橘門について知り得たことであるが、まだ不明なことが沢山ある。父逍遥君のこと、中島子玉のこと、備前の医学修業のこと、賀来飛霞との交友、四教堂教授

となった事情、嗣子新太郎のことなど、分からないことばかりである。これらのことが全て分かるとは思えないが、手掛かりでも得られれば幸いという心組みであった。

二時間という時間は極めて早く佐伯駅に着いた。駅の出口は海に面し、城跡は反対側である。電話で教えられた通り、駅の客待ちのタクシーに乗り込んで、羽柴弘先生を訪ねたいというと、これも電話で聞いた通り運転手はよく承知して、城跡より更に西の稲垣地区に車を走らせて、あの山が城跡、こちらへ行けばどこ、羽柴先生の家へはこの道が近道と言いながら、石垣の上に建っている家並の部落へ入るとスピードを落して

「この奥に龍護寺があってこの部落も龍護寺と言います羽柴先生の家もここです」

と言っていると、石垣の上に中年の婦人の姿が見えて呼び止められた。羽柴先生のお宅かと伺うと「そうだ」とおっしゃる。隣の窓から老夫婦の姿が見え、待ち設けておられた様子であった。石垣の角を曲がると南向きの玄関口がある。「佐伯史談会事務局」と書いた大きな板額が掲げられていた。

羽柴先生は七十四、五歳の温厚な風格のある老紳士であった。私は初対面の挨拶の後、簡単な自己紹介と訪問の目的を述べると、羽柴先生も手短かに自己紹介の後、預め電話で申述べて置いた私の質問に応ずる資料を取り揃えておられて、それについての説明を加えながら「差し上げます」と下さった。

羽柴先生は、佐伯近くの本匠村の出身で、幾つかの小学校の校長をした後、定年前に退職し、幾人もの子供の教育のために、この地に住居と農地を買い、農業のかたわら郷土史を研究し、佐伯史談会を組織し、ガリ版刷りの会報を二十年ほど発行し、現在では会員が五百名余に成長しているということであった。

「史談会にとって最も大切なことは会報を出すことですね。あなたも会報を是非お出しなさい」

とおっしゃった。会報の積み重ねが『佐伯市史』となり、今は本匠村史の編さんに取り組んでいるが、その資料にもなるというお話であった。話の間に奥様からお茶を出していただいた。奥様は

「主人が健康を損なったのは、農業によるのではない様に思います」

と、夜の更けるまでのガリ版切りや、研究や調査のた

めの過労を気遣われているようであった。史談会の話、資料の話、橘門の話など承っている間に時間は極めて早く過ぎ去ってしまった。奥様から昼食の準備が出来たからと告げられて自分のうかつさに気付いた。私の初めの予定では、十一時ごろまでお話を承ったら、先生を誘うて街に出て、どこかで昼食を共にして遺跡の案内を願い午後3時過ぎの列車に乗るつもりであった。しかし、今は昼食の用意をして下さったのだからありがたく頂戴するのが礼であろうと思った。

奥様の心の籠った昼食はおいしかった。それと知られぬ間に、心の限りを籠めたはからいは、料理の盛り方一つにも、物腰の様にも現れる。人をもてなすすべを、物の見事に教えられた思いであった。そんな折、私が椅子に掛けている所からよく見える玄関に、老夫婦とも見える丈の高い二人の人が見えた。羽柴先生はすぐ立って行って応対せられた。

「東京から兄が来たものですから、ここいらをあちこち見て回っています。ちょっと先生にもお会いしてと思いまして」

という話の様子から、日ごろ史跡などを一緒に尋ねたり、史実を共に調べたりなさる史談会の会員の一人でもあるようで、久方ぶりに東京から帰って来た年老いた兄を連れて、思い出の故郷の史跡をめぐる散策の途中で羽柴先生を訪ねてみようという兄と妹であるようだった。

「それはようこそ。天気もよいし、それは何よりだ。私の所には、今日は宮崎からお客が見えているのでお相手出来ないが」

などと話しておられる言葉遣いや話の内容から、羽柴先生を郷土史の大先達とし、先生もそれにしっかり応じておられる間柄であることがよく分り、タクシーの運転手もその人の名を聴いただけで案内する羽柴先生という人の人柄がうなづけるのであった。その人たちはやがて辞し去った。

私達もすぐに橘門碑と橘門先生の父である逍遥府君の墓のある龍鼎山松雨台とを訪ねることにした。辞去するに当って、奥様と先生に、佐伯史談会事務局の看板の下に立っていただいて記念の写真を撮らしていただいた。

佐伯城跡の三の丸櫓門前で車を下りた。この門はひどく損傷していたのを、羽柴先生が市民に呼び掛けて寄付を募り、修復せられた由。その右手が、鶴屋城の大手門

更に右へ進むと武家屋敷が続く。時代の波に押されて築地や、土蔵造りの家の白壁が崩れているのは痛々しい。国木田独歩が下宿していたという家の前を通り過ぎるとやがて養賢寺僧堂の山門があり、門内にどっしりとした僧堂の本堂が見える。

山門を入って右へ進むと築地屏がある。それに沿うて進むと、築地屏は右に直角に曲がってすぐまた右に曲がる。そこに、高さ約一メートル三〇センチ方形の苔むした石碑がある。それが橘門碑である。碑文は苔むして読み難いが、羽柴先生に戴いた資料に、佐伯の医者益田学氏が克明に書写したものがある。それによると、中島損謹誌、高妻友直謹書とあり、内容は谷永祚撰の伝と大差はない。ただ、四教堂教授となった事情と、建碑の事情が書かれている。

それによると、中島子玉（しぎょく）は、咸宜園での橘門の学友であった。橘門は塩谷氏に日田を追われると子玉の友情によってその生家に仮寓することになったのである。仮寓三年に及んだというから、子玉の父母もまた優れた人であったに違いない。子玉は後に四教堂の教授になったが若くて病没したので、高妻士直が任を継いだ。しかし、士直も生来多病で力の及ばないことを恐れ水筑太可（橘門）を推薦した。その時太可は延岡藩内藤氏の所にいた。佐伯藩に行ったのは『日向採薬記』巻之一の次の文で、天保十五年二月であったことが分かる。

すなわち

「十日（天保一五年三月）・・・急行シテ水城氏ノ家　ニ至ル。太可、偶、佐伯藩文学黒田慎吾、高妻謙之進　二子ノ為ニ招カレ、二月十日ヲ以テ発シ、文学ノ助教　タリ」

「橘門碑」の文を作った中島損は、中島子玉の兄固一郎の子、子玉の甥であり、橘門に師事し、明治四年咸宜園に入門した。「時軒」と号した。佐伯の漢学者らしい最後の人ではなかったかと言われている。文字を書いた高妻友直は、太可を藩学に推薦した高妻芳洲士直の次男善道であって、太可に師事し、後に東京府に勤務したが明治十七年に没している。

さて、橘門碑から私達は毛利の墓に参拝した。養賢寺本堂の丁度裏に当る山の中腹にあり、石垣の上に築地屏をめぐらした一画で、門内は五輪塔が「コ」の字型に並ぶ立派な墓である。案内版に毛利氏の歴代略系も記して

あった。原文は羽柴先生の作ということであった。

慶長六年（一六〇一）初代高政が日田から転封になり明治四年まで十二代が佐伯二万石の藩政に当ったという毛利氏の略系

高政ー高成ー高尚ー高重ー高慶ー高道
　　└高丘ー高標ー高誠ー高翰　高泰
　　└高謙ー高範ー高棟

参拝を済まして一旦元に下り別な路から裏山に登った羽柴先生の話によると、橘門碑は明治十八年に完工したものであってその設立寄付人名簿が残っているが、その趣意書によると、初め養賢寺の鼎山松雨台に建設された由である。しかし、その後年月が経ち、その地が何処であるか寺でも知らず、市内の古老も全く知らなかったのを、医師益田学氏が発見したのだということであった。羽柴先生の後について鼎山松雨台に向かった。私は後に「鼎山」は「龍鼎山」であることに気付くことになった後日、『橘門韻語』上巻に「松雨台」と題する詩の註に

予家墓域名在龍鼎山

とある。「龍鼎山」が正しく鼎山は略称である。韻語中に「松雨台落日長望」という詩もある。

広い墓地であった。墓と墓の間を縫うように細い路を進み、龍鼎山の急斜面にかかると路は急に険しくなる。羽柴先生の足が少しよろめきがちである。私が危ぶむと

「しばらく休んでいたためだが大丈夫だ」

と言われる。

つまづきでもされた時は、すぐ手が出せるように、出来るだけ接近して歩いた。

急斜面の細道を幾曲がりかすると頂上に着いた。頂上というより尾根（背稜）で十数メートルが平らになっていて、その向こうはまた涯のような急斜面になっているその尾根の一区画が水筑家の墓地である。

東面して「逍遥府君之墓」と、その夫人の墓があり、外に二基、南面して二基がある。ここが松雨台である。昔は松があったのであろう。眼下に養賢寺と鶴城高校が見える。

逍遥府君の碑文は苔むしているが深く力強い刻字で、橘門先生の筆跡がよく窺える。向かって左側面から背面にかけて刻まれ、その末尾には高妻芳洲の碑銘がある。右側面には輪郭を縁取った線刻で、逍遥軒耕雲西畴居士と法名がきれいに彫ってある。

益田学氏が写し、更に訓読されたものを示すと次のとおりである。府君は亡父の尊称である。

府君諄は（空欄で刻してない）字は善卿、姓は水筑氏系は大蔵谷より出で、世々宗国高鍋に仕ふ。父祖三世は退き本荘（本庄）の野に耕し至る。府君は人と為り慷慨、家を再興せんと欲し諸子をして学ばしむること剣の如くす。

弘化乙巳（一八四五）、不肖孤、文学を以て禄を本藩（佐伯藩）に徴し明年迎へてこれを養ふ。

府君は安永戊戌（七年一七七八）六月五日に生れ、嘉永甲寅（安政元年一八五四）七月十八日に卒す、享年七十七、鼎山松雨台に葬る。配、湯地氏は四子寛、龍時、則を生む。寛は二歳夭（わかじに）、則は十七歳病みて没し、共に郷の盌池山（さらいけやま）に葬る時は留りて先龍（祖先の墓）を守る。二女、長は緒方氏に適（とつ）ぎ、次女は従ひて侍養す。龍の釈褐（仕官）は府君の志にして又其の教誨（おしへ）の賜なり。然らば則ち佐伯の水筑氏有るは府君の看たるなり。不肖孤、龍、泣血謹述す。

これ正これ方は　君子の履むところ、
肖遥道を執る　昊天降祉その身に於てせざるも
これその子に於てす。　この人没すれども死せず

高妻友謹んで銘し併せて書す。

以上によって分かるが、なお多少付け加えると、諄は元、通称は周助、号は西畴（名長治という）本庄で医を業とし、採薬のことで延岡藩に招かれた。

再び元の細道を下り、中腹から右手（西）へ進み、橘門碑文の選者、時軒中島損の墓に額突いた。中島家の子孫は今は東京に住み、墓は羽柴先生が祭っておられると言う。又元の道へ引返し養賢寺の山門を辞し街へ出た。鶴城高校の門のあたりから、龍鼎山を顧みると松雨台あたりに陽が当り、中島家の墓域のあたりはうっそうとした繁りの中であった。

羽柴先生は印刷屋に寄らねばならないと言われるので鶴城高校の前でお別れして駅に向かった。羽柴先生から親しく案内を受け、行き届いた説明と心のこもった配慮を戴き、実りの多い一日であった。

その後更に羽柴先生からは幾回もご教示の便りをいただき、新太郎の孫秋月秀次氏の書簡も五通ほど、コピーを取ったら返送するようにといって送って下さった。感謝に堪えない。それらによって分かったこと、更に他の

方面から分かったことなどを今少し書付けて置く。

○　日田代官塩谷某

塩谷大四郎正義、文化十四年（一八一七）　天保七年（一八三七）日田では名代官と言われ、高鍋藩続本藩実録にもしばしばその名が見える。（一例天保六年五月十五日）博多屋の広瀬久兵衛と組んで水利開田事業を行った。文政六年上井出村小ケ瀬トンネルで玖珠川の水を引く小ケ瀬水路を開き、十三村五百余町を潤し、文政八年より七、八年かかり、宇佐・西国東両郡の海岸埋め立て呉崎新田（豊後高田）などの新田を開く大工事を行い、義倉を設けたことで咸宜園に陰徳倉記があり、慈眼山に顕彰碑のあることが大分合同新聞刊の『二豊小藩物語』に出ている。

○　水筑太可即ち秋月橘門と賀来飛霞の交友関係については、飛霞の著『日向採薬記』の巻首に、天保十五年八月十二日付けの水筑太可が飛霞に送った手紙全文を載せ延岡藩に薬草採集に行った次第を書いている。既に紙数が尽きるのでそれをここに書くことが出来ない。『日向採薬記』は若山甲蔵著の『日向文献史料』に「賀来飛霞先生の日向採薬記」として紹介があり、また三一書房刊の『日本庶民生活史料集成』巻二十に『高千穂採薬記』として掲載せられていることを記して置く。

○　橘門水筑太可が備前で医を学んだが、その師は難波立愿である。『高千穂採薬記』の巻首の右の書簡の次に難波直の『送賀来季和南遊　序』があり、その中に

「太可嘗従尊人学　医、得吉賀花三子之術其辞帰尊人」

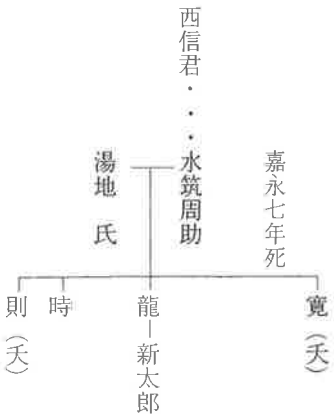
とあるこの尊人とは難波直の父難波立愿である。

立愿（一七九一―一八五九）徳川末期の医家。名は経恭、字は子敬、抱節と号した。備前金川村の人。家は代々備前の国老日置氏の侍医。文化八年吉益南涯に内科、賀川蘭斎に産科を学んだ。文化十一年大阪の華岡鹿城（青洲の弟）に外科学を修め、帰郷開業し業大いに行われた。立愿は常に刻苦励精、古今の医書を探り能く病理に通じ起死回生の効を奏すること多く、門前市をなしたという。門人を教うるに諄々として門人の業を開く者千五百人に及んだ。因に序文中の「吉賀花三子」とあるのは、吉益南涯・賀川蘭斎・華岡青洲の三子で、太可もまたその術を学んだというのである。

○　橘門の嗣子新太郎　天保十二年（一八四一）生。飛霞の書簡に材次郎としているが村次郎である。

安政二年（一八五五）十五歳で咸宜園に入門したが、入門書には名「務」と書き、入門紹介者は父小相となっている。羽柴先生に来た新太郎の孫秀次の書簡によると字は大愚、号は必山、又は天放、七月二十八日生。豊後佐伯藩に仕え、後東京府に移る。陸軍参事官、内務・文部各省に出仕し、後東京女子高等師範学校長、正五位勲三等、貴族院議員。『橘門韻語』の出版者児玉昱蔵は後に新太郎の養子となり、秀次氏の父上だという。なお、羽柴氏によると、新太郎は容姿端麗で、文武に秀で、武官としては佐賀の役の鎮撫に功あり、乃木大将と同期の少佐任官であるという。

○　系　図



○　橘門の著書『橘門韻語』二巻、秋月新太郎選。外に高鍋図書館には、備前藩・難波承彊夫、高鍋藩・水筑弦佩弦選の『橘門韻語』巻之一があり、内容の配列が前書と異なる。また、如蘭社話中に『橘門随筆』がある。

秋月新太郎には『天放存稿』『天放漫筆』がある。

知事秋月橘門先生碑